

四條畷市教育フォーラム 2015 (H27.2.7)

大阪大学大学院 志水宏吉教授 講演抄録

テーマ「学力を伸ばすー学校・家庭・地域の連携」



〇『つながり格差』が学力格差を生む

みなさん、こんにちは。よろしくお願ひいたします。ご紹介いただきましたとおり、今回で3年目ということになります。先ほどは一時間にわたって現場の先生方、教育委員会の先生方の報告がありました。随分と気合が入っていると聞かせていただきました。また、手話通訳・要約筆記の方は、こうして西日本で話をするときには、よく入っていただいておりますが、あまり早くしゃべったらだめですねとお聞きしましたら、大丈夫ですということですので普通にしゃべりたいと思います。

学力の問題を学校・家庭・地域の連携のテーマと絡めて話をして下さいということですので、その方向で話を進めていきます。できればこれまでの3年間を1クールのまとめということにしていきます。

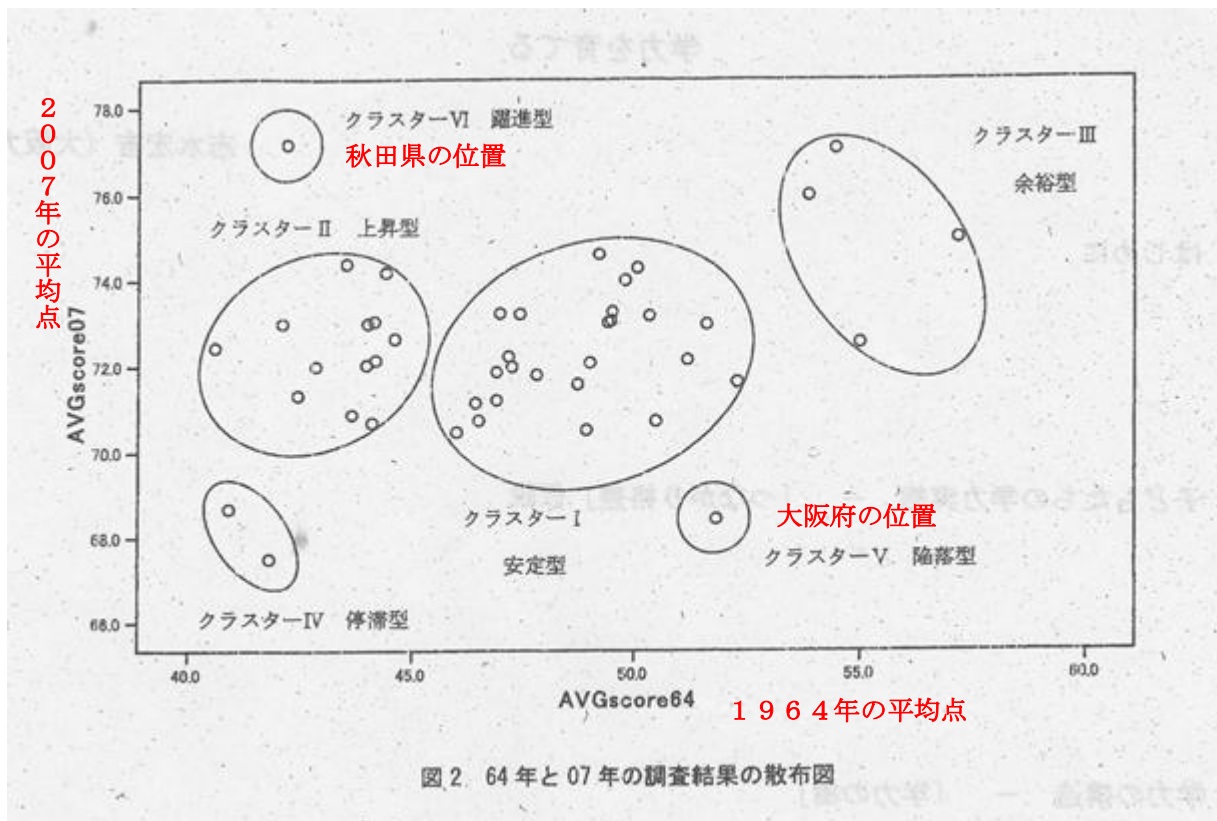
先ほど、ご紹介いただいた「『つながり格差』が学力格差を生む」という本を出しています。昨年や2年前と一部かぶることがあるかもしれませんが、本日の話を理解していただくため、くりかえしになるかもしれませんが、ご容赦願ひいます。

はじめに、お手元の資料集の最終ページにそってお話したいと思います。冒頭クイズを出します。今日は、比較的保護者や地域の方が多いと聞いています。もちろん先生方もたくさんおられます。いまから4つ都道府県名を言いますので、4つの中で全国学力調査結果の一番高いところと、一番低いところに手を挙げてください。①秋田県、②東京都、③大阪府、④香川県です。去年、秋田の多賀谷先生がこられましたのでヒントになるかもしれませんが、一番高いのはどこでしょう。秋田だと思われる方？ 東京だと思われる方？ 大阪？ 香川？ その通りです。秋田です。では、一番低いところは？ 香川県は上位です。一番低いのは残念ながら4つの中で大阪が一番低いです。

〇1964年-2007年 逆転した秋田と大阪

秋田の成績が高いことは周知の事実ですが、2007年のテストの結果が出たときには、私はびっくり仰天しました。かれこれ、1999年～2000年ぐらいから私は学力の問題をやっております。私は学力の専門をやってきたつもりですが、秋田がトップになるとはだれも想定していませんでした。私も、秋田の多賀谷先生もびっくりしておられました。ふたを開けてみたら秋田がトップだったというのが真実です。それ以降変動があるのですが、下の方にいたのが、沖縄、大阪、高知、北海道だったんです。沖縄県は今年とてもがんばって、小学校はぱっと前に出たのはご存じのことと思います。しかし、中学校になるとあまり順位変動はありませんでした。中学校の成績を上げるのは困難だからということでしょうか。

もう一つ言っておかなければならないことを今から述べます。昔も全国学力調査があったのです。1964年ですが東京オリンピックのころです。私がまだ5歳だったころですが、全国学力調査というものがあつたんです。そのころは、秋田県は下のほうだった。なので、最近トップになったときに、誰も想像していなかった。1964年と2007年の間、全国学力調査は実施されていませんでデータがないからわからないですが、下位から上位にあがったのが秋田県。逆に大阪と東京はトップでしたが下位になった。なぜそうあつたのか。調べて出てきた結果が「つながり格差」だったのです。



お手元の資料の最終ページに図表があります。左のページにグラフがあるのですが、これはなにをしたかといいますが、2007年の全国学テの結果と1964年の関係を見てグラフに示したのが図2になります。小さな白丸が都道府県。1964年の報告書を大阪大学図書館で見つけ、都道府県別にその数値をわり算して出したのが横軸（x座標）です。同じように2007年（縦軸y座標）に、小学生中学生の国語、算数、A問題、B問題、これを足して8で割り大阪の平均点をだす。都道府県別に縦軸と横軸に落とし、「クラスター」グループみたいなものですがグルーピングしたらこうなりました。延びている県や落ちている県がある。まん中に「安定型（クラスター1）」があります、一番大きくて一番たくさんの県があります。私は兵庫県西宮の生まれです、兵庫県はちょうど中央でした。兵庫県は阪神もあり但馬もあり、都市部と田舎などいろいろ集まっていますが、テストの点数もまんなかでした。

昔、点数低かったが現在になって上昇してきているグループは、これを調べてみますと、ほとんどが東北地方と九州地方でした。東北と九州は、昔はふるわなかったが、今はよくなっている。さらに、ずば抜けてよくなっているのが一つの「躍進型（クラスターVI）」、秋田県ということになります。特に飛躍的に秋田県がのびた。右下の「陥落型（クラスターV）」が大阪です。

これら以外で、上位県の「余裕型（クラスターIII）」は4県あります。これは福井、富山、香川、愛媛ですが、昔も今もトップ集団。なぜかはちゃんと誰も分析していないのでわからない。逆にしんどいところは2つあります。「停滞型（クラスターIV）」の北海道と高知県です。沖縄はどこいったのということですが、この時、沖縄は本土返還されていなかったので、テストすら受けさせてもらえませんでした。もしこのときに受けていたら、おそらく沖縄もここにはいていただろうと思います。

〇学力の3つの要因

いろいろ調べて分析しましたが、典型的な結果が表6にあります。テストの点数といろいろな統計指標の相関をとってみました。いろいろ項目があります。これと都道府県別の点数の出方をかけあわせてみました結果、3つの要因の関係が深いとわかりました。

表6 学力と各指標の相関

	小学国語 64	小学算数 64	中学国語 64	中学数学 64	小学国語 07	小学算数 07	中学国語 07	中学数学 07
総人口	.225	-.059	.340(*)	-.182	-.153	-.173	-.222	-.152
外国人割合	.401(**)	.099	.417(**)	-.421(**)	.050	.076	.042	.172
年少人口割合(14歳以下)	.693(**)	-.376(*)	.715(**)	-.673(**)	-.455(**)	-.425(**)	-.331(*)	-.325(*)
生産年齢人口割合(15~64歳)	.564(**)	.245	.651(**)	-.582(**)	-.106	-.143	-.219	-.160
老年人口割合(65歳以上)	.099	.190	-.057	.013	.256	.277	.312(*)	.253
人口増減率(対前年比)	.309(*)	.118	.386(**)	.310(*)	-.199	-.210	-.203	-.118
離婚率	.332(*)	.049	.461(**)	.322(*)	-.246	-.267	-.343(*)	-.309(*)
離婚率	-.103	-.102	-.216	-.215	-.560(**)	-.536(**)	-.708(**)	-.653(**)
実収入	.401(**)	.168	.514(**)	.436(**)	.539(**)	.462(**)	.512(**)	.418(**)
消費支出	.457(**)	.194	.542(**)	.466(**)	.447(**)	.325(*)	.514(**)	.406(**)
教育費割合(対消費支出)	.356(*)	.162	.367(*)	.314(*)	-.047	-.119	-.210	-.178
教育娯楽費割合(対消費支出)	.497(**)	.566(**)	.482(**)	.566(**)	.132	.090	.036	.134
生活保護率	.452(**)	-.318(*)	.606(**)	.618(**)	.387(**)	-.331(*)	-.602(**)	-.506(**)
持ち家率	-.241	.070	-.270	-.165	.444(**)	.444(**)	.552(**)	.517(**)
第1次産業者割合	.524(**)	-.189	.609(**)	.546(**)	.049	.041	.078	-.064
第2次産業者割合	.522(**)	.260	.662(**)	.638(**)	.312(*)	.281	.536(**)	.575(**)
第3次産業者割合	.358(*)	.016	.329(*)	.225	-.324(*)	-.295(*)	.538(**)	.491(**)
学校教育費	.160	-.104	.277	.124	-.082	-.126	-.223	-.170
児童一人あたりの教育費(小学)	.457(**)	.191	.485(**)	.460(**)	.226	.203	.116	.065
生徒一人あたりの教育費(中学)	.385(**)	.162	.412(**)	.330(*)	.118	.068	-.103	-.162
小学校数(児童10万人中)	-.124	.032	-.221	-.131	.010	-.013	.012	-.079
中学校数(生徒10万人中)	-.371(*)	-.211	.455(**)	.435(**)	-.064	-.092	-.097	-.195
教員一人あたりの児童数(小学)	-.029	-.114	.063	-.008	-.069	-.051	-.090	-.003
教員一人あたりの生徒数(中学)	.096	.126	.122	.110	.093	.091	.078	.137
私立学校割合	.360(*)	.017	.419(**)	.236	-.018	.035	-.240	-.126
高校進学率	.649(**)	.286	.705(**)	.628(**)	.361(*)	.361(*)	.473(**)	.435(**)
大学進学率	.621(**)	.389(**)	.593(**)	.570(**)	.242	.328(*)	.167	.370(*)
暴力行為 いじめ	—	—	—	—	-.152	-.141	.473(**)	-.369(*)
いじめ	—	—	—	—	-.069	-.075	-.066	-.045
不登校率	.094	.107	-.031	-.029	-.174	-.134	-.337(*)	-.247
日本語指導が必要な生徒	—	—	—	—	.023	.037	.030	.117
へき地校数(小学)	.401(**)	-.367(*)	-.373(*)	-.369(*)	-.259	-.405(**)	-.170	-.264
へき地校数(中学)	-.373(*)	-.359(*)	-.354(*)	-.346(*)	-.292	.436(**)	-.229	-.310(*)
学習塾数	—	—	—	—	-.066	-.069	-.225	-.125
学習塾数(1万人)	—	—	—	—	-.320(*)	-.216	.403(**)	-.160

キーワードの一つ離婚率(家庭・家族と子どもとのつながりの豊かさ)、2番目が経済の欄の持ち家率。キーワードの2番目は持ち家率(地域・近隣社会と子どもとのつながりの豊かさ)。3番目は、不登校率(学校・教師と子どもとのつながりの豊かさ)という要因があります。この3つが現代的な要因でいくとベスト3ということになります。で、それにたいして昔の結果をみたら、もう明らかに経済的要因が子どもの点数の出方に現れていました。生活保護率みたいなものです。東京と大阪の学力は昔は高かった、低かったのは秋田県とか宮崎県です。私の母方の実家が宮崎県の日南市ですから腑に落ちたんです。ときどき宮崎に帰ると自然に恵まれている。多くの人が第一次産業で、中卒や高卒で農業や林業についている。そして20歳前後で結婚する。学校の勉強はそれほどする必要はなかったんです。勉強に駆り立てる割合が、都市部ほどではなかったのだろう。2つ思い出があります。一つは東京オリンピック、私の家は西宮市です。祖父が材木屋をやっていました。高度経済成長ですので羽振りがよかったある日、4本足のついたでかいカラーテレビがきました。校長先生あたりなら覚えているかもしれません。近所の人がカラーテレビを我が家に見に来るとかそんなことです。

宮崎県の田舎に帰ったらテレビはあるのですが、白黒でしかもチャンネルが2つしかない。見たいテレビ番組は2週間ぐらい遅れの番組がみられた。もう一つはトイレです。私のトイレは水洗便所でした。近隣では速かったほうです。宮崎の田舎にいきますと、そこは農家でしたので、家の外に掘立小屋があって、それがトイレでした。夜中にトイレにいきたくなっても怖いからいけない。母親を起こしてトイレに行っていました。このように都市部で暮らす子どもと、田舎で暮らす子どもの環境が全く違っていました。都道府県格差は大きくありました。今も都道府県格差もありますよね。

でも格差は絶対値が上位と下位との差が半分ぐらいに縮まっているのです。それほど大きな差はないです。秋田県トップ、〇〇県下位といってもそれほど差はない。大阪の自治体で格差があったとしても日本と第三世界との格差に比べたら微々たるものです。ただ、そうってしまうと終わってしまうので話を続けたいと思います。

離婚率が高い県では、こどもの平均学力が低くなる。これは誰が考えても明らかですよ。離婚にはいろんな理由が絡んでいますが、少なくとも小中学生からみたらつらい、悲しいにきまっている。家族関係にひびがはいる。家庭生活が不安定になって勉強どころではない、そうなると思います。そういう家庭が多い自治体は相対的に学力が低いです。離婚率は、家庭と子どものつながりに揺らぎをもたらしている。

ちょっと順番を変えまして不登校率です。不登校にもいろいろと要因が関わっています。大阪は不登校率は高い水準です。秋田県は全国でも一番下です。不登校率が高いことにわれわれの言葉では、不登校は反社会的なタイプ（非行・怠惰型）と非社会的なタイプ（身体型）があるといいますが、不登校が多いのは、子ども自体が持って生まれたものとはとてもではないが言えません。大阪は不登校になりやすい子どもが生まれるとは言い難い。環境がそう仕向けると私は考えます。持って生まれたものが大阪と秋田でそんなに違うかなとは思いません。しかし、地域の環境と都市部の環境が違います。したがって不登校は学校・教師と子どものつながりの太さ、残念ながら都市部ではその絆みたいなものが細くなっているのではないかと。

3番目に残ったのが持ち家率です。家をもっているのですから経済的要因と関係あるだろうと思うのですが、全国の持ち家率の高さをみたら、上から富山県、秋田県、福井県で8割水準です。一番低いのは大阪で6割ぐらいの水準です。でも、大阪のほうが平均県民所得は高い。秋田は下位です。大阪はしんどい家庭も多いが、リッチな家庭も多い。秋田は貧しい家庭も多いしリッチな家庭もすくない。秋田県では、3世代同居率が8割、9割になるとある学校の校長先生がいうので驚きました。つまり親族のネットワークがある。それだけではなく近隣の人と子どもたちのつながりが非常に強いのではないかと。行事やらイベント、お祭りなどで地域がつながっている。持ち家率の高さは近隣社会とのつながりの豊かさを表すのだろうと考えました。

以上のように、家庭・地域・学校と子どものつながりの豊かさにまとめることができるだろう。秋田や福井みたいにそれらの数値が高い学校は、明らかに学力が高い。言っておきますが、大阪全体のつながりが低いわけでは決してありませんし、四條畷は、大阪の中でもつながりが高い市だと思えます。言いかえれば一つの自治体でも市町村ごとのつながり度合いが違い、パッチワークみたいになっています。

つながりの濃淡は学力の濃淡にかなり相関している。それがつながり格差という話です。以前お話ししたと思いますが、学力格差は、東京の人は経済格差と考えます。そのため、貧困対策が必要と言いますが、我々が見出したのは、貧しい家にお金を給付してそれで済むのかというところではない。その家庭のお父さん、お母さん、子どものまわりにどれだけ支える人がいるのか、教師がつながっているかが重要と考えています。貧しいが故に孤立していることが問題なのです。ただ、今まで言ってきたのは一つのレベルの話であって、もうちょっと話は簡単ではありません。

〇つながりの質と量

それがつながりの量と質という話になります。数年前です。いろんな地域を訪問していたところに、秋田県のある町と、その直後に沖縄県のある島に行ったことがありました。つながりの質という話になります。秋田県の八峰町です。多賀谷先生がいた町です。今、八峰町の中学校にお勤めなんですが、秋田県の教育委員会の紹介で行きました。その町は学力面で非常に優秀だったからです。行ってみたらすごいところで、自然に囲まれた秋田県が一番はっこの山と海のまちです。そこの小中学校の学力が秋田県の中でもトップで非常に高かった。授業を拝見したら、先ほど花岡指導主事が言っていましたように、子どもの学び合いの水準はとても高かった。私がびっくりするような授業が行われていました。

2つびっくりしました。1つは6年生で誰も塾に行っていない、塾がないからです。もう一つは、私が行った前年に3つの学校が統合した。統合した小学校に秋に行ったんです。その年の4月に3校の子が集まって受けたテストの結果が全国でトップだった。ということは、4月からの各校の個別の力や担任の力ではなかった。三つとも以前からみんなすぐれていたということです。八峰町について地域の重鎮のような方とも話しました。八峰町は秋田県の中でも寒村です。ここに江戸時代に鉱山が発見されました。鉱物を求めて明治時代に東京からある会社が出て、技師や職人が都会から移ってきたそうです。お屋敷を村外れにつくって会社を運営した。屋敷から楽しそうにコーヒーを飲んだりテニスをしている姿を村の人たちが見たところ、ああいう暮らしができればいいなと思ったそうです。どうすればああいう暮らしができるのか。ネクタイしめなあかん、ネクタイしめるためには中等教育が必要。第二次世界大戦後に日本が戦争に負けて新しい学校制度がしかれたときに、秋田大学ができ、教育学部ができた。当時の町の指導者が1年に2名ずつ、優秀な若者を村から奨学生として派遣した。しっかり勉強し、卒業したら教員になってくれと送り出したのです。そしてちゃんと帰ってきて小学校や中学校の教員になり、年に2名ずつの教員を育てる教育の村づくりをしてきたという伝統があったのです。教育をしっかりやるのが村を育てることになると考えこれまで60年、70年やってきたそうです。

その後に沖縄県にいきました。今年、沖縄県は小学校で若干良い結果が出たようですけども、当時は最下位でした。本島よりも離島のほうがよりしんどいということでしたので、紹介していただいて久米島にいったのです。泡盛で有名な島です。サトウキビがたくさん生えている島です。そのときは小学校しか訪問できませんでしたが、夕方、校長室で雑談をしていたときに、家庭・地域のサポートは非常にあるが、でも学力はしんどい。校長先生がいうには、島の人たちは学校教育に期待しているのはペーパーテストの点数ではない。ずばり体力と人間性だ。海人を育てるために体力と人間づくりに取り組んでおられました。とはいえ、やはり学力最下位ではいけないとおっしゃっていました。沖縄はスポーツがさかんです。小学校でも部活のようにやっていて、夜、保護者や地域の人が車をもってきてグラウンドを照らす。対外試合をするときにはフェリーが必要ですが、そんなことは労をいとわずやってくれる。つながりはあるんですよ。でもつながりの質でいくと、秋田の地域の人たちは学校教育、沖縄の島ではそれも大事かもしれませんが、強靱な体力と円滑な人間関係が大事とされてきたのです。

○秋田・福井の違い

秋田県とか福井県とかでも、いろんな経験をさせていただきました。3年かそれぐらい前になりますが、秋田県能代市に行ったことがあります。秋田県は日本で一番少子高齢化がすすんでいます。学校統廃合が喫緊の課題になっていますが、行ったその学校は、小中一貫校でした。新しい校舎を作って小中一貫でやっている。校舎も職員室も一緒。児童・生徒あわせて100人ぐらいしかいません。その町にはこの学校しかない。林業がさかんなエリアですので、林の一部を学校林として貸与して総合の学習や理科・社会の学習として学校林を活用する。授業には地域の爺ちゃんがサポートする。地域ぐるみになって学校を支えている姿がある。学校全体が縋ひのき造りになっている。

去年の夏ぐらいに福井の教育に関する本を書きました。「福井の学力・体力がトップの秘密」。うちの研究室のメンバーとしょっちゅう福井に行きました。秋田が有名になっているが、学術的に福井県の教育の特徴を調査研究してくれと頼まれたのです。福井のすごいところは、学力が秋田としのぎを削っていますが体力テストは福井が全国1位なのです。さきほどと同じ理屈なのですが、福井県の子どもが遺伝子的に体力があるのではなく、環境がそうさせているのです。学力テストと同じように体力テストのスコアが全国と比べて抜きん出ている。学力もそう、体力もそうということは何かあるのだろうということで調べ、2つのキーワードにまとめました。

群れる力と鍛える学校文化。簡単に言います。人間も動物ですので、動物は群れて生活すると思います。時々日本文化の批判として日本人は群れて生活するから主体性がないとか言われますが、私は積極的な意味で群れる力と本では書いています。その裏返しとしての気持ちは、都市部は群れる力が育っていない子どもが生まれているのではないかと。その責任は大人や地域の課題。都市部では群れる力を失いがちになっているのではないかと。福井にいくと地域の中で学校

の中で健全に群れる力が育まれている。具体的にいきますと、福井県にいくと爺ちゃん・ばあちゃんがえらいんです。私は今55歳ですが、福井に行くとは中堅です。30代は若手、子どもとなると見習みみたいなものです。縦の系列ができていく。上のやるように見よう見まねでやる、指示にしたがってやる。いろんな局面で感じられました。もう一つは学校の先生も同じなんです。教員集団が猿山の群と同じような形で機能している。これについては批判する向きがあります。全体主義ではないかという人がいますが、私から見たらいい形で作用していて、ベクトルがそろっているのです。私が大切にしているところです。教育目標に一致して同じ方向に向かっている。自分のポジションでできることを歯車として、チームの一員として取り組んでいるという一面があります。

鍛える文化につながりますが、しんどい側面もありません。福井県では「無言清掃」が取り入れられています。1～2分正座・黙想して、その後10～15分無言で雑巾がけ中心にとりくむ。私は西宮の生まれ育ちで大阪との関わりが高いですが、大阪の子どもは帯でちゃんばらしたりしてませんか？そのイメージからいくと福井の子はすごいです。最初のほこり取りは帯使わず雑巾がけ、中学校にいくと私と同じぐらいの教務主任の先生も、体育館のはしからはしまで雑巾がけをしている。私は体育館のはしで見学していました。「やっぱり子どもと一緒にやらなだめです」とすがすがしく説明してくれました。すごいなと思いました。雨の日は廊下で縄跳びをするとかいろいろあります。学習面においても、子どもの力を引き出す要求水準を高いところに設定して全員で取り組んでいます。

課題があるとしたら、やっぱりそれについていきにくい子どもが出てきて、不登校状態に陥ることもあります。それが課題と県教委の方も言うておられました。不登校率の低い方から8番とか10番。大阪は40何番で不登校も大変多いです。福井で印象深かったことは、福井は天気予報では嶺北地方、嶺南地方といいます。嶺北地方の小浜市に行きました。高学年の遠泳の授業です。小雨がパラついてたんですね。私と県の指導主事で行きました。説明を聞いていると、5年生は200m、6年生は600mぐらい海を泳ぐ。その日が、5年生の子にとっては初めて海で訓練する日だった。雨が降って見通しが悪くて、5年生が体操して海に。6年生も行くんですが、海に入るのをしぶる子がいるんです。泳ぎ出しても波がきておぼれそうになっている子がいる。子どもらの何人かはギャーとか死ぬとか、そういう局面になります。先生方はライフジャケットを着用して海にいます。海上にはボートが5せきぐらいでている。保護者や地域の方が協力して乗っている。おぼれかけた子どもが、海の中で教師にとりすがるので、どうも先生が子どもの頭をおさえつけて水中につこんでいるように見える。ターンするところではしんどくなった子どもがボートによじのぼろうとすると、ボートに乗った初老の紳士がつき落とししているんです。でも子どもらは、最後に浜に戻るときは、すいすいと泳いでいるんです。校長先生にたずねました。「海に沈めている場面がありましたけど」、「激しい厳しい指導かもしれないが、遠泳が伝統の行事であり、何よりも将来、海難事故にあったときに助かるように、自分の命を自分で守る力をつけるためにやっている」と。海の中で頭を水中につけるのはライフセービングの基本。ボートから突き落とししていたのは、その子どもの祖父だということでした。

いまのエピソードで言いたいことは、大阪ではできないことだと思いますが、福井では先生がやることを保護者や地域が全面的にバックアップしているように地域・家庭の信託を受けて先生方がやっています。本番になると、子どもが60人ぐらいに対して、保護者や地域の方が100人ぐらい応援に駆けつけるように、福井のあり方のシンボリックな場面かなと思って見ていた次第です。

〇保護者の役割 子どもに「家庭学習ハビトゥス」を育てる

残りの時間、保護者の役割、地域の役割に入っていきたいと思います。

まず、保護者の役割。「学習習慣の定着」が先ほどのプレゼンでも再三強調されていました。子どもたちに確かな学力を身につけさせる一番重要な戦略ポイントは、「学習習慣の形成だ」とずっとそうに思っています。我々教育社会学の用語のなかに「ハビトゥス (habitus)」という言葉があります。英語の「ハビット (habit: 習慣・クセ・習性)」と似ています。私は学習習慣の形成というときに学習ハビトゥスあるいは読書ハビトゥスと思うようにしています。ど

うということか言いますと、私は、中学校から今に至るまでサッカーをしています。私は、サッカーボールをける習慣が身についています。サッカーハビトゥスが身に付いているといえます。私の年代の人間は、ゴルフをやる人間はけっこうおります。私も2〜3回やったことがあります、ボールがちいさすぎてダメでした。ゴルフをする人は打ちっぱなしとか練習に行ってます。それは、ゴルフハビトゥスを身に付けるためということになります。私は、こういう仕事をしていますので、暇なときは活字を読まないで落ち着かないんです。これは、読書ハビトゥスが備わってるといえます。長い期間同じことをやっていると体がそういう構えになるということです。突然、サッカーボールが飛んできた場合、サッカーのヘディングをとっさにやるということです。

古い事例ですが、大学時代東京に行きました。最初の夏休みに家に帰省をしました。家族で晩御飯を食べていたのですが、たまたま父親を見て気づいたのですが、父と同じように私の箸の持ち方が変わったんです。娘のやるのが母親に似ているのと同じで、それがハビトゥスの最たるものです。学習ハビトゥスなるものがあるなと思います。で、昔、「朝シャン」という言葉がはやったと思いますが、朝シャンしないと気持ち悪く思う小中高校生と同じように、「宿題をしていかないと気持ち悪くて学校にいけない」という子どもをつくってください。それが学習ハビトゥスの形成です。そこまで行くのは難しいのですが、うちの3人の息子の話をしたいと思います。今から20数年前に2年間、イギリスの大学勤務に行ったのですが3人の息子たちも一緒にイギリスに連れていき、向こうの小学校、幼稚園、保育所に入れたのです。2年後に帰国。一番上の子どもは、小学校に復帰しました。二人は学力面は問題なかったのですが、まんなかの子どもは、家の中では関西弁ですが、学校にいくと英語環境、二男はほどなくバイリンガルになりました。2年たって日本に帰ってきて、4月から小学校1年になった時から地獄の日々が始まりました。頭が英語で完全に初期化されているので、ひらがなが文字として認知されないし拒否する。漢字の「木」を学習すると、文字に意味があるということを受けつけない頭になってしまった。妻が高校の国語の教員をしていたのでいろいろやるんですが、ほぼ受けつけない。そこで妻がねばり強くやったことは2つ。毎日、家族みんながくつろぐ居間で3人一緒に兄弟で勉強する。2つ目は、わからないことがあったら必ず辞書を引く。その2つをしつこくやらせたようです。なんとか持ち直して若干上向きになり、高1のあるときに母親にポロッと言ったそうです。「母さんがしつこく辞書を引けといった意味が今わかった」と言ったそうです。要するに辞書を引く、最初は入ってこないが引いたらわかる、世界が広がる、知識が広がるということが子どもなりに10年たってわかった。「ハビトゥスが育った」ということです。その確かな習慣が、旺盛な意欲を生み出します。このように確かな学習習慣がつくと、新たな学習課題に対してチャレンジしてみようと思うようになる。

それを家庭の中でやってほしい。じゃあどうしたらいいか、小学生の子どもを学力をあげたいのなら、「読書に親しませる」のは鉄則です。プラス、「勉強しろと決して言わない」で下さい。勉強しろというと勉強しないのが大阪の子どもです。2番目には、「勉強する場をつくる。家庭の中に勉強する場と時間を保障する。」3番目には、「望ましいのは勉強を見てあげる。一緒に横で見てあげる。」小学校のある段階まではできる。一緒に横で新聞を読んだり、本を読んでいてもいい。個室に閉じこもって勉強するよりも、同じ場所で、みんなでお茶を飲みながら学習をしたほうが成績があがる。それを「お茶飲み学習」といってます。データのにもいい結果が出ている。「ハビトゥス的には、お母さん、お父さん、自分が何かに打ち込んでいる、勉強している姿を見せるのが大事です。親が学んでいる姿を見せると、たいがいの子どもは勉強するようになります。」

〇地域の役割「地域の子どもは地域で育てる」

地域の役割。先ほどつながり格差の話をしました。医学の領域でも同じことが言われています。イタリアかどっかの話だったと思います。心臓病の調査をやったときに非常に不思議な結果が出てきた。同じような経済状況、同じような文化水準にあるいくつかの町を比べたときに、ひとつだけ、突出して心臓病罹患率がきわめて低い町があった。いろいろ調べると、地域住民のつながりが豊かだった、としか考えられない。それが心臓病の罹患率に影響を与えていると言わざるをえないということです。教育コミュニティという言葉を書きましたけれども、私の師匠といえる大阪大学の池

田 寛（イケダヒロシ）という教授が提唱された考え方です。今から10数年前に大阪府教育委員会がその考え方を取り入れて、「すこやかネット」という組織を立ち上げて施策化しています。

もともと、どの地域にも地縁血縁のネットワークがあった。これはまちがいないことです。ですが、近代化が進み都市化が進み、学校教育が入ってきて、大阪とか東京のような大都市ができてサラリーマンが町をつくるようになった時に、地縁・血縁が分断されてしまった。校縁（学校の縁）社縁（会社の縁）の崩壊がどんどん進み家族が、母親が孤立化し誰も助けてくれない状態になっている。そこで、新たにコミュニティを作りましょう。「地域に生まれ育つ子どもの取り持つ縁=子縁を育てましょう」という取組みになってきました。子どもは地域の財（たから）という言葉が紹介されました。今いろんな価値観をもった人がいます。でも、暮らしている人は空間を共有している。そこには新しい世代の子どもたちが生まれてくる。親だけで育てるのではなくて、一緒に育てましょうということです。もちろん責任をもつのは親ですが、「地域の子どもは地域で育てる。」この共通の目標のもとに地域の人が出会って、幼稚園や学校でいろんな行事やイベントをする、そこで新たな人間関係を作っていく。秋田福井と違った大阪に即したいろんな事例があります。

神戸のある中学校では、山の手の学校で、学力が高いです。あるきっかけでめちゃめちゃ荒れたそうです。神戸の学習院がえらいことになった。これを立て直すために地域の力を借りるしかないということになって、PTA会長が音頭をとって、応援団をつくろうとされたところ100人以上の人が名乗りをあげた。学習支援や環境整備、見守り隊、4つの班に分かれたそうです。同じTシャツやトレーナーを作って、壁のペンキを塗り替える、登下校には町の角々に立つ、ピアノを弾ける奥様がいたら授業のお手伝いをする。まるつけをする。その形の中でみるみる学校が落ち着いていった。そんな学校の話もあります。もともとその地域は、経済的文化的に豊かだった。そんな学校が荒れた、そして地域の力でよい学校になったという話もあります。

本来ならばもっと具体的な話をしたかったのですが時間がきました。10年ほど前に「学力の樹」という考え方をつくって、あるシンポジウムを高知県でやったことがありました。一緒にシンポジストと雑談していて面白いと聞いたのは、私の「学力の樹」は根っこが大事で、それが立派な幹や葉を育てるという話ですが、その方はPTA連合会の会長で、農家でくだものを作っている。文旦（ぶんたん）という果物を作っている。つくるのは難しいようです。苗木を育てる時に、ある一定の大きさになったら竹を3本スティック状に加工して組み合わせて、バランスがとれたら茎がすっと伸びて育つが、バランスがとれないとあまりうまく育たないということがあるようなので3本の竹の支えを大事にされていました。「私は、この3本の竹が地域・学校・家庭だと思う」と言っておられた。なるほどと思う。一般的には母親が子どもを大事に考えすぎて、ちょっと過保護すぎる部分がある。「家庭と学校と地域がバランスよく寄り添うことが大事なんじゃないかと思ってPTAの活動をしている」と言っておられた。私の頭の中に非常に鮮明に残っていて忘れられない話です。

いろんな場所に行って素敵だなと思うのは、保護者のサポートがあり、地域のサポートのしくみがあるところだと思います。四條畷の次の3ヶ年で、ますますランクアップ、ステップアップしてほしいと願っています。

これで終了させていただきます。ご清聴ありがとうございました。



文旦（ぶんたん）